



# 覗く眼

第8回

「おまえ、あそこの村は居心地良かったか？」

「いや・・・不便そうですね」

「そうじゃねえよ」

源治は沢井の額を軽くこずく。

「まあ、田舎ってあんな感じなんですかね。他所者扱いっていうか・・・」

沢井は、どう答えれば良いのかと答えを探しているふうだ。

「まあ、何か違和感を感じていれば刑事として合格だ」

源治は子どもを褒める時のように、ニヤリと笑う。

「すいません。俺、田舎暮らしとか経験ないもんで」

「ああ。田舎ってのは他所者は受け付けねえもんだ。ただな、あの村、何だか見張られているような気がしてな」

「まさか」

沢井は目をまるくする。

「まあ、雰囲気だ。ただな、あの警官」

「田部さんですね」

「おお、そうよ。あいつ俺たちが動くたびに、どこに行くんですか、なんていちいち聞いてきやがってたな」

「珍しいんですよ、きっと」

沢井はあの朴訥な警官に疑いの目を向けられているのが、意外そうだ。

「気づいてたか？ あいつ俺たちが出て行ったら、しょっちゅう何処かに電話してたぜ」

「まさか」

沢井はいよいよ信じられないといった感じで、源治を見る。源治はそれ以上あの警官の事を言っても無駄と感じたか、別の話を口にする。

「あの千餓村ってのはな、もともと（餓死者で千体の死体が出た）って伝承とかがあって、いつの間にか、そう呼ばれるようになったそうさ。田畑をつくるのに、適した土地じゃないんだな」

源治は意外な話を披露して、さらに続ける。

「つまり、酷い貧乏村って事だな。ところがあの村の連中、家や身なりは一見粗末そうに見えるが、特に生活に困っている風では無さそうだったぜ」

「はあ・・・」

「おまえはよ、こんな経済成長している東京のど真ん中で暮らしているからわかんねえかもしれねえが、ちいと違和感があるぜ」

沢井はまったくピンと来ないのだろう。いくら源治の事を尊敬している唯一の同僚とはいえ、このあたりの時代感覚のズレはどうしようもない。

「オヤッサン、話が見えないですよ」

沢井は、頭の中がこんがらがり始めたせいか、結論をせかす。

「いいんだよ、わかんなくても」

源治はタバコを床に放り、もみ消す。

「とにかく、おまえはこの件とはもう関係ねえ。いいな」

沢井は口を開きかけたが、源治の厳しい目がそれをさせなかった。

大内源治が担当した事件で、いくつか未解決のものがあった。中にはどうしても犯人の目星がつかなかったものもある。ただ、あと一步、犯人らしきものの尻尾は見えているにも関わらず、それに触れられなかったり、尻尾だけを切り離し逃げ去ったものもある。それがこの間、期せずして警察庁長官が口にした“国鉄や銀行の事件”というものだ。この時も源治は、上からの一方的な捜査打ち切りの命令を受け、解決に至らなかった。

「署長、GHQだか政治家か知らねえが、そんなもんが絡んだから腰が引けましたじゃ、警察の意味なんて無いと思いますがね」

「大内君、言葉を慎みなさい」

時の署長は、源治を一喝した。源治もまだ若かったし、組織の中での立場を考える気持ちもあった。源治はこれらを、“手打ち”にすることを不承不承ながら受け、関わるのを止めた。

今回の事件は、それらに比べればそこまできな臭い影は見えない。けれども源治の長年培ってきた勘が、同じ種類の匂いを感じさせる。もはや組織の中に自分の居場所を失いつつある源治が、この事件から手を離す理由は無かった。

源治は間をおかず、千餓村に出発した。時間がかかれば、警察内部で何らかの処置が行われる可能性があるからだ。万が一、刑事の肩書を失うようなことになれば、どうしようもない。源治は乗り込んだ自動車の中を、心の中で急かし続けた。

「何が夢の超特急でい」

署内が新幹線開通の話題で盛り上がっている時、そう憎まれ口を吐いて雰囲気が悪くさせた事もあったが、今だけはこの夢の超特急に乗り、ひとつ飛びで千餓村に向かいたい気分だった。